

## 【文書 01】

### 「原始仏教聖典資料における遊行に関する諸記事の現地検証調査」報告会

報告：森 章司（東洋大学教授）

開催日：平成 12 年 1 月 28 日

会場：普門館国際会議室

ホームページ掲載にあたって

現時点ではこの後のより精細な研究によって、この報告の主題である「遊行」について基本的なところにおいて見解の相違が生じてきているが、遊行の具体的な事項については変更すべき点がないので、報告そのままをアップすることにした。現時点での見解については「モノグラフ」第 14 号に掲載した【論文 16】「遊行と僧院の建設とサンガの形成」を参照されたい。

(2009.12.4 森 章司)

#### 目次

- 【1】 研究の現状
- 【2】 現地検証調査の目的
- 【3】 現地検証調査の概要
- 【4】 仏教中国の自然環境
- 【5】 遊行の実際
- 【6】 涅槃経＝最後の遊行を読む
- 【7】 終わりに

#### 【1】 研究の現状

立正佼成会ならびに中央学術研究所におかれましては、私どもの研究に多大のご理解とご支援を賜りまして有り難うございます。

調査報告をさせていただきます前に、ごく簡単に研究の現状をご報告させていただきたいと思います。

この研究は原始仏教聖典資料を元に釈尊の生涯を再構築しようとしているわけですが、一昨年度の研究所の学術総会の時にご報告させていただきましたように、1 万数千点の原始仏教聖典資料をパソコンに入力するという第 1 次作業を終了いたしまして、現在第 2 次段階に入っているところでございます。

いわばバラバラに散らかっていたジグソーパズルのピースを、1 万数千ピース拾い集めたというのが第 1 次作業でありまして、現在これを 1 枚の絵に組み上げようとしているわけでございます。

しかしこれを組み上げるためには、もともとこのジグソーパズルが、どんな絵柄であったのかということがわからなければ、組み上げようもありません。もちろんそれは釈尊の生涯を主題にしているわけですが、それがどんなトーンで描かれていて、細部まで焦点を合わせた細密画のような絵柄だったのか、あるいは相当大胆にモデファイされたピカソのような絵であったのか、といったイメージを想定しなければなりません。

また1万数千のピースの1枚1枚をしげしげと眺めているだけでは、とても全体の絵柄を組み上げることはできません。したがってこれをシステムティックに行う必要があります。

要するに、断片的な原始仏教聖典資料を釈尊の生涯の時系列にしたがって再構築するためには、その基礎理論と方法論を確立し、また收拾した資料をより精密に分析整理しておく必要があるということで、こうした作業が現在の研究段階でございます。そこでその成果を中央学術研究所のモノグラフシリーズの、一つは「基礎研究篇」として発行していただき、もう一つは「資料集篇」ということで発行していただく手はずになっているわけでございます。本年度中にはそれぞれ1冊を発行していただくことができると思います。

## 【2】 実地検証調査の目的

そういう研究の現状を踏まえて、「原始仏教聖典資料における遊行に関する諸記事の実地検証調査」というテーマの元に、昨年11月10日から12月4日にかけて、約1ヶ月弱の期間、インドを実地調査させていただきました。

何だか物々しいけれど、一体これはどういう調査なのかという疑問をお持ちの方もいらっしゃるかもしれませんので、この趣旨をかいつまんでお話をさせていただきます。

お釈迦様時代のインドは仏教のみならず、ジャイナ教その他のいくつもの新しい宗教が生まれ出た、新宗教勃興の時代でありました。彼らは等しくその生活形態から、比丘、沙門、遊行者、遍歴者などと呼ばれていました。

## 資料 01

## 釈尊時代の宗教家の生活形態

比丘 bhikkhu (skt.bhikṣu) 乞う人  
沙門 samaṇa (skt.śramaṇa) 努力する人  
遊行者 paribbājaka (skt.parivrājak) 遊行する人  
遍歴者 saṃniyāsin (skt.) 世を捨てる人

「遊行せよ。……一つの道を2人して行くなかれ。……法を説け、  
梵行を顕示せよ

(caratha bhikkhave……mā ekena dve agamittha……desetha  
dhammaṃ……brahmacariyaṃ pakāsetha) 「Vinaya」 「受戒健  
度」 (vol. I p.20) SN.4-5 (vol. I p.105) cf.DN.14  
Mahāpadāna-s. (vol. II p.48)

「勿二人共行」 『四分律』 「受戒健度」 (大正 22 p.793 上)

「各各分部遊行世間」 『五分律』 「受戒法」 (大正 22 p.108 上)

「汝等各可隨詣諸方、為諸衆生作大利益、且令汝等各各而不用同行」

『根本有部律破僧事』 (大正 24 p.130 上)

釈尊もその一人でありまして、したがって本来の仏教の出家者の生活形態は、1ヶ所に定住するのではなく、むしろ町から町へ村から村へ、乞食しながら遍歴するのが基本でありました。そこで釈尊も「遊行せよ、2人して行くな」と檄を飛ばされたわけです。

後には雨期には遊行してはならないという規則が作られるようになり、また祇園精舎や竹林精舎など、各地に大精舎が建設されるようになりまして、定住化の傾向をたどるようになりますが、一方では雨期が終わったらたとい5、6由旬でも遊行しなければならないという規定も作られるわけです。ですから「遊行」は、釈尊教団形成史のなかで若干の変化はありますが、基本的には大きな修行徳目としての要素を有していました。釈尊にとってはそれは「巡教」であり、仏弟子にとってはいわば「布教」と「自身の修行」、それに「聖地巡拝」の意味が加わっていたのではないかと思います。

釈尊の入滅の模様を描いた経典は「涅槃経」ですが、この経典は「遊行経」と漢訳されています。お釈迦様は生まれ故郷のカピラヴァットゥに帰られる途中で、志半ばにして亡くなったといった解釈がありますが、私はそうは考えません。歳をとって故郷に帰りたくなっただというのとは、それは凡俗の考えることで、「遊行」こそが宗教者の勤めであり、日常であったとすれば、それは決して志半ばの死ではなく、それこそ宗教に殉じられた死であり、それが本望であったと考えたほうがよいと思います。ですから私は、生まれ故郷に帰られようとして、その途中で亡くなったのではなく、経典の言う通り、クシナーラーを死に場所として定められて、そこで入滅されたのだと考えています。

このように釈尊の生涯を再現し、その意味を理解するためには、遊行の実態をよく理解しておくことが必要です。遊行という釈尊時代の宗教家の基本精神・基本行動のモチーフ

を軽んじますと、釈尊伝の絵柄のトーンが違ったものになってくるわけです。

このように「遊行」は釈尊伝を再構築する際のグランド・デザインに関係してくるようになりますが、実は「釈尊年表」を作成するためには、もっと实际的・具体的・直接的に関係して参ります。例えば、釈尊は35歳の時に、ブッダガヤで成道後、ベナレス近郊の鹿野苑で初転法輪されたとされます。

成道はインド暦のヴェーサーカ月の満月の日、すなわち中国の古代暦では2月15日とされますが、それから7・7、49日間悟りの楽しみを楽しまれ、その後梵天勸請によってブッダガヤを出発されたとしますと、それは4月の初め、4月5日ころになります。

しかしインドの雨期は4月半ばころから始まり、8月中ばころまで続きます。現在のグレゴリオ暦で云いますと、6月初めから9月一杯位までに当たります。後でお話させていただきませんが、インドの雨期は猛烈なもので、雷交じりのシャワーよりも強い雨が1週間くらい続いて、2、3日置いて、また1週間雨が降り続くという状態が約4ヶ月続くのだそうです。ですからインド中が水浸しになるといって過言ではありません。したがって道路は寸断され、身動きができなくなります。釈尊教団では雨期には遊行してはならないという規定が作られますが、実際には遊行したくても遊行できなくなったのではないかと思います。

もちろん雨期に入る日には年によって相違はありますが、さてお釈迦様の成道の年に、はたして4月の初めにブッダガヤからベナレス近郊の鹿野苑まで遊行できたのか問題です。ちなみにブッダガヤからベナレスまでは現在の最短の道路距離で約260キロですが、この間を10日間以内で旅行できたとするなら、雨期にかからなかったかもしれません。しかしこれを確認するためには、お釈迦様はブッダガヤから鹿野苑まではどのようなコースを通過して、1日大体どのくらい進まれたのか、だから何日くらいで到着できたかということを知る必要性が出てきます。そのためには、お釈迦様は馬に乗っていたのか、それとも船を利用されたのか、徒歩だったのか、もし徒歩であったとすると時速何キロくらいで歩かれたのか、出発は乞食して昼食を済まされてからだったのか、それとも朝早くに出発されて、1日中歩かれたのか、といった疑問がすぐに浮かんできます。そしてこういう疑問が解かれなければ、お釈迦様はブッダガヤからベナレスまで何日間かかったのか、雨期に入る前に到着されたのか、あるいは雨期を過ぎてから到着されたのか、ということが分かりません。

インドの仏教教団では、出家者の年齢は雨安居を何回過ごしたかということで数えられます。所謂「法臘」です。したがって年は雨安居が終わる7月16日に改まることとなりますが、もしお釈迦様の年齢をこの数え方によって数えるとするならば、初転法輪は雨期前の35歳の時か、雨期明けの36歳の時かということで、年表はすぐさま1年の誤差を生じることになります。

このようなことは原始仏教聖典が、ある時舎衛城から王舎城に遊行されて、耆闍崛山に留まられたとか、それから釈尊は耆闍崛山からヴェーサーリに行かれたとかというとき、

いつでも生じる問題です。遊行が何月ころ行われて、舎衛城から王舎城までは徒歩でいかれたから何ヶ月とか、いや船を利用されたから何日間、ということが分っていなかったら、舎衛城から王舎城、それからヴェーサーリまで行かれたのは同じ年なのか、あるいは雨安居を挟んで明くる年になったのかということが判明しないで、われわれの目指しているせめて月単位で釈尊の年表を作ってみたいという野望は永久に達成できません。

そこで今回は釈尊や仏弟子たちがもっとも活発に活躍したと考えられるガンジス河流域の諸地方（現在では Bihar、Uttar Pradesh 両州）を、釈尊や仏弟子たちがもっとも活発に遊行したと考えられる時期を選んで、以下のような項目を調査してみようというものでした。

## 資料 02

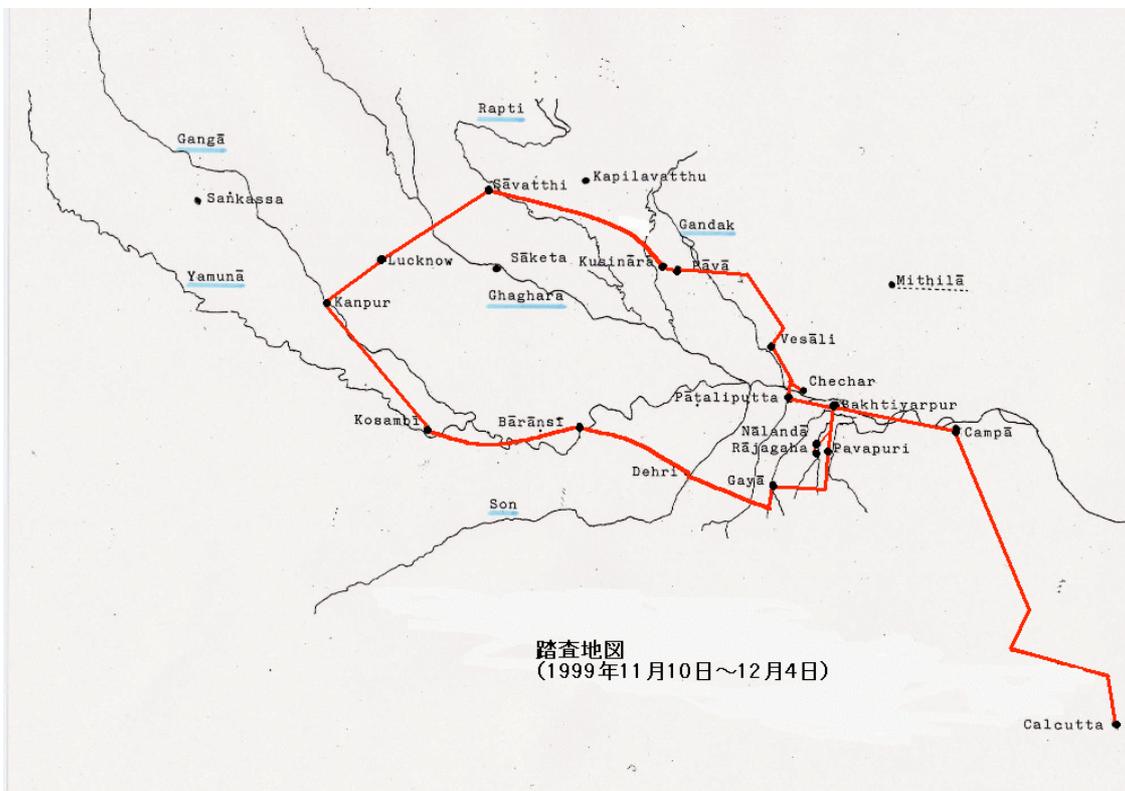
### 「原始仏教聖典資料における遊行に関する 諸記事の实地検証調査」項目

- (1) 原始仏教聖典に記されている釈尊が雨安居を過ごされ、また遊行された地名＝すなわち釈尊が活動された地名で、現在地が判明していない場所の特定
- (2) 上記安居地・遊行地を結ぶ交通路
- (3) 遊行の交通手段（馬車や船を利用したか）
- (4) 遊行の行われた季節
- (5) 遊行に要した期間（1回の遊行で何日間くらいを使ったか）
- (6) 遊行の平均的行程（1日にどれくらいの距離を進んだか）
- (7) 遊行の形態（1人で遊行したか、集団で遊行したかなど）

#### 【3】实地検証調査の概要

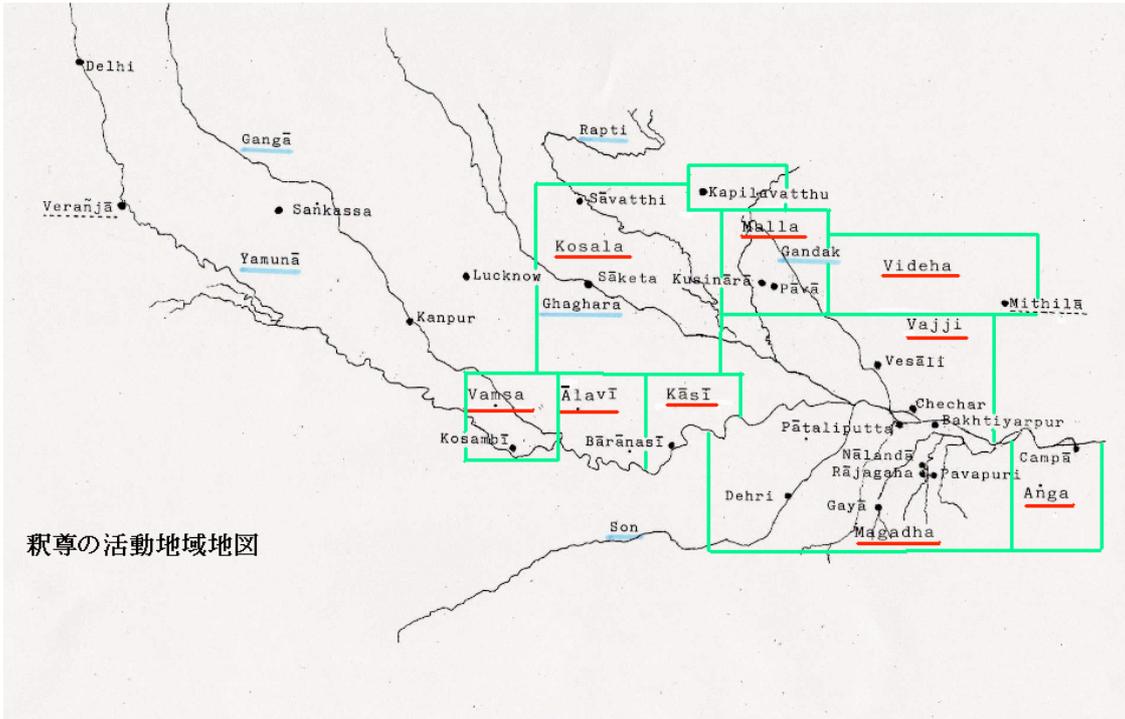
われわれは以下のような日程で、インド各地を調査して回りました。

これは釈尊の活動された地域の全域をほぼカバーします。釈尊ご自身が遊行された地域は地図の通りです。



踏査地図  
(1999年11月10日～12月4日)

資料 04



釈尊の活動地域地図

\*国名、地名をパーリ語で示す

この間、インド人ガイドの Tiwari さんと、ドライバーと車掌さんと、北原・中島・私の合計6人の旅でした。車はインドの旅行社が TaTa 製のミニワゴンを用意してくれまして、ただ一度の故障もなく、快適に走ってくれました。インドは物価が安く、インド人の泊まるようなホテルに泊まって、インド人の食べる食事を食べていれば、ほとんどお金はかかりません。例えば昼食はほとんど街道筋のダーバーとよばれている茶店で済ませましたが、大体6人でお腹一杯ご飯を食べて、500円以上かかるということはありません。衛生がちょっと心配ですが、むしろあまり窮屈な強行日程の方が体調には影響するのでは

ないかと思えます。われわれは午前7時前には出発しない、午後5時前には到着するという大前提で行動しておりましたから、比較的ゆったりした日程で、そこで全身体調を崩すこともなく、お陰様で元気で帰って参りました。

さてこの地図のうち **Campā** (チャンパー) と **Sāketa** (サーケータ) の位置がわかりませんが、今回の調査である程度はっきりした結論を得ることができました。

まずアング国の首都であった **Campā** ですが、これは律蔵の中に「チャンパー犍度」という1章が設けられている、その舞台となったところです。このチャンパーは行く前にある程度の見当がついていたのですが、文献の言う所とは違う、現在の Bhagalpur の西約8キロのところにある現在の **Campānagar** という村であるらしいということが分りました。写真は現在 **Campa**河と呼ばれている河です。

#### 資料 05



Champanagar ①



Champanagar ②

ここには現在われわれの見る事ができる形で古代の遺跡が残されているわけではありません。この村の中に創建されて350年というジャイナ教のŚvetāmbara派の寺があり、ここで話を伺いましたが、その確認はとれませんでした。

#### 資料 06



しかしパトナ博物館の Dr. O. P. Pandey 氏によりますと、1970年にここをパトナ大学が発掘調査して、10個くらいの古代の建物跡が発見されたということです。その報告書は出されているのであるが、残念ながら出版されていないそうです。

われわれ自身の眼でその確たる証拠を確認できなかったのは残念ですが、Pandey 氏の話やさまざまな状況証拠からして、現在の Campānagarが古代のアンガ国の首都 Campāの故地に identify されて然るべきであろうという結論に達しました。

## 資料 07



余談になりますが、Pandey 博士にはこの後ホテルに来てもらいまして、詳しく話を伺いました。博士は仏教美術の専門家で、Patna に ‘Centre for Buddhist Culture’ という仏教の研究機関があり、そこから ‘Bodhi-cakra’ (法輪) という雑誌を出し

ておりまして、その編集を担当していらっしゃいます。

実はわれわれは王舎城から、ヴェーサーリーに至る交通路がどこを通過していたのかという大きな問題を抱えておりまして、これについて議論してみたいということで招待したわけですが、このとき博士からパトナの対岸にある Hajipur という町からガンジス河を23キロほど下った北岸に Chechar (チェーチャル) という寒村があり、AD7、8世紀のパラ王朝時代に建設された大規模な遺跡が埋もれているという情報を得まして、これも解決しました。

そこでその翌日、博士に博物館を休んでもらいまして、ご自身にここを案内してもらいました。

## 資料 08



Chechar ①

ここからは発掘されたという仏像2体と、今は畑となつているところにある僧院跡の石積み部分の1部しか外には現れていず、未だ未発掘ですが、パンデイさんによると、ガンジス河に沿って約3キロにわたって遺跡があるということでした。

要するに釈尊時代の王舎城とヴェーサーリーを結ぶ道は、現在のようにパトナのところでガ

ンジス河を渡るのではなく、もう少し下流で、王舎城からはほぼまっすぐ北上したところで渡っていたということになります。釈尊が亡くなってからパトナは大都市として発展することになりますが、在世中のパトナはまだ寒村でしたし、パトナの辺りは北からガンダック河とガーグラ河が、南からはソン河がガンジス河に合流する地点にあたりまして、そのために後世に物流の中心地として発展することになるのですが、渡河地点としては河の流れが激しく水量が多すぎて適当ではありません。このようなことを考えますと、釈尊時代の王舎城とヴェーサーリーを結ぶ道路はこの Chechar あたりを通過していたのではないかと推測するのです。

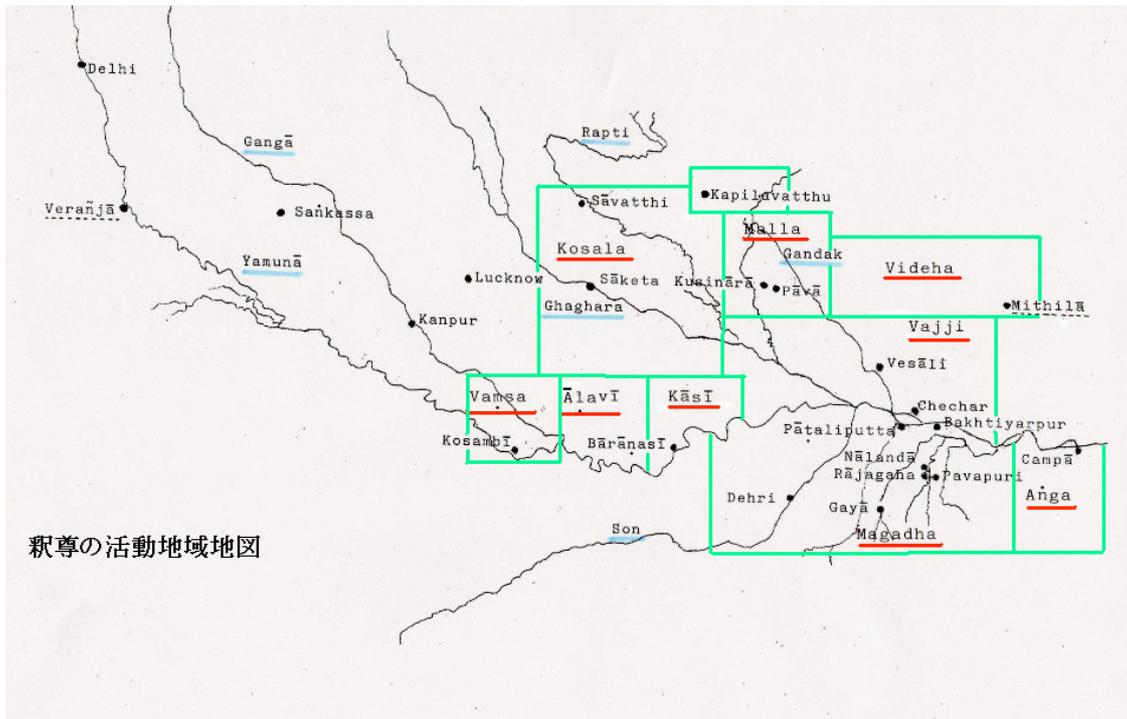
また Sāketaは玄奘三蔵や法顕三蔵の旅行記の記述が曖昧で、問題のあるところで、そこでカンプールまで行ったわけですが、結局行く前に考えていた、現在の Ayodhya に相当するのではないかという結論を得ました。Ayodhya はインドで一番親しまれている神様のラーマの生まれ故郷で、ヒンドゥー教の聖地の一つですが、この聖地の上にイスラム教徒がモスクを建てているということで、ヒンドゥー教徒とイスラム教徒の紛争のきっかけになったところでした。原始聖典の記述から言いますと、ここもコーサラ国内なのですが、治安がよくないということで有名です。こういうことがあったからではありませんが、その時にはサーケータはもっと西ではないかという疑問もありましたので、ついうっかりして Ayodhya を通らない道を選んでしまいましたので、Ayodhya の写真はございません。

なお、この地図には書き込んでありますが、実はまだ Mithilā と Verañjā の位置がよくわかりません。これは釈尊が実際に足を踏み入れたもっとも東北と西になります。お釈迦様は Verañjā で雨安居を一度過ごされていますが、食事を供養するものがなかったために、キャラバン隊が持っていた馬の餌の麦を食べられたとされています。いずれも当時の所謂仏教中国の辺境に当たりますから、まだそれほど仏教は盛んではなかったのではないかと思います。

#### 【4】 仏教中国の自然環境

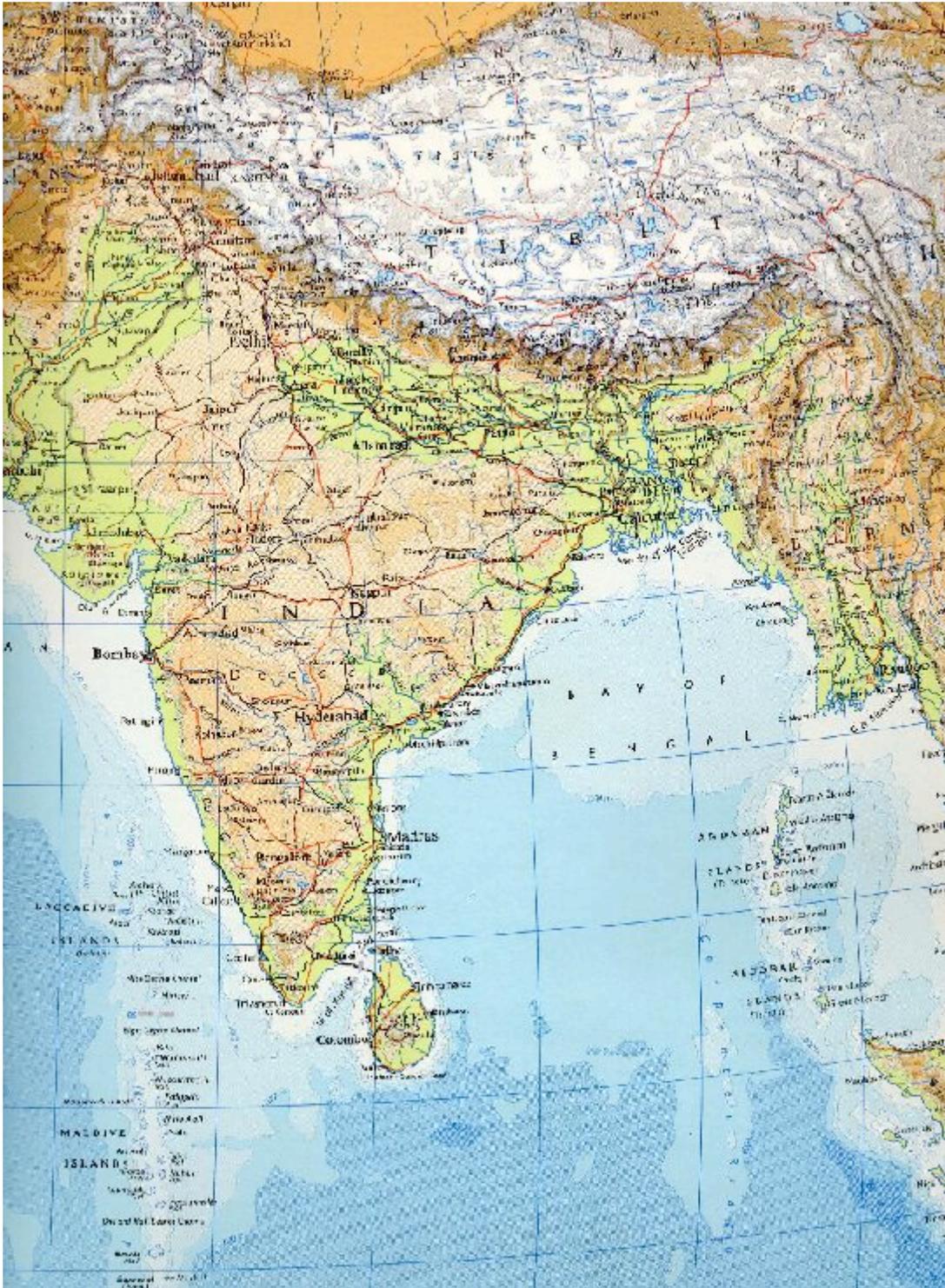
もう一度「釈尊の活動地域」地図をごらん下さい。

#### 資料 04



これが「仏教中国 (majjhima-desa, madhya-deśa)」と呼ばれる地域です。この地域の中がお釈迦様の活動場所でした。といてそれではこれが仏教が広まっていた地域であるかというところではありません。お釈迦様はこの範囲から外に出られたことはありませんでしたが、しかしこの外の世界には弟子たちが盛んに布教いたしました。

資料 04 b



南はゴダーヴァリー河流域、西はインダス川流域まではお釈迦様時代にすでに仏教が伝わっておりました。そういう意味では、お釈迦様の活動域はあまり大きなものではありません。

さて、このお釈迦様の活動域の地理的特徴を少し申しあげておきます。

地形図をごらん下さい。

資料 09



インド亜大陸は大きく分けると、ヒマラヤ山脈部と半島部分のデカン高原、そしてこれらに挟まれたヒンドゥスターン平野部分とタール砂漠部分に4分割されます。この平べったい部分の西の方がタール砂漠で、この東に広がっている部分がヒンドゥスターン平野部分です。仏教中国はこのヒンドゥスターン平野のほぼ真ん中に位置します。

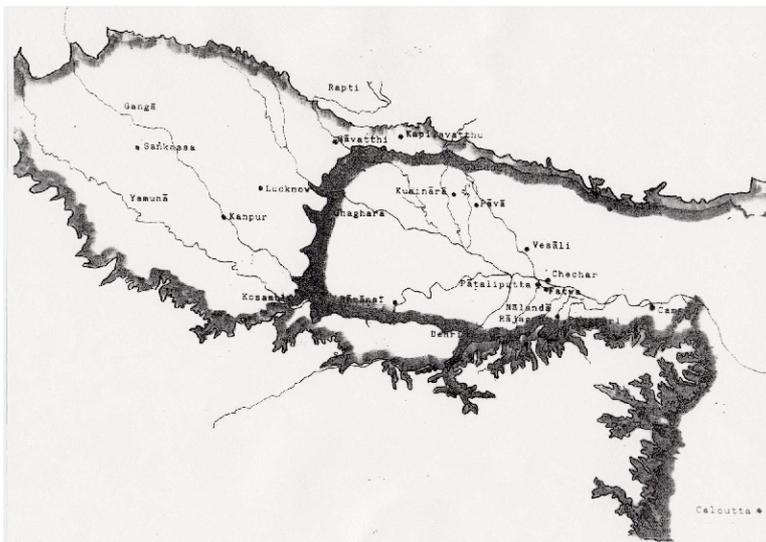
ヒンドゥスターン平野地域は、更新世（洪積世）のころには瀬戸内海のような内海で、それ以降、北側のヒマラヤ山脈と南のデカン高原から運ばれる大量の土砂により埋め立てられて形成されたものです。いわば泥によって埋められた、大規模な埋め立て地です。仏跡のどこに行ってもほこりっぽいのは、このためです。

しかしまったく平べったく見えるヒンドゥスターン平野も若干の高低差がありまして、海拔0～100メートルと100～200メートルの部分に分けたのが、この地図です。

資料 10a



資料 10b



釈尊の主な活動地となりました、コーサラ国の首都・舎衛城と、王舎城、そしてコーサンビー、バナレスは 0~100 の周辺部に当たりますから、ヒンドスタン平野では少し高いところにあるということになります。特に王舎城は山に囲まれています、これは土砂が堆積した

部分ではなく、内海に浮かぶ島であったということになります。

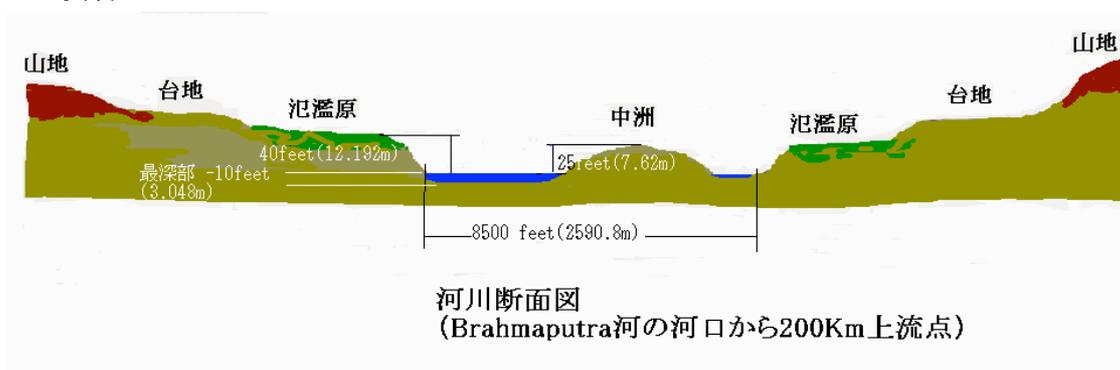
次に気候ですが、この地帯はモンスーン気候帯で6月から9月一杯が雨期で、この期間に年間降雨量の 90%以上が降ります。反対に11月から5月くらいまではほとんど雨が降りません。気温は4月5月ころがもっとも暑く、摂氏45度を越すことも珍しくありません。

こういう地理的、気候的状况を元に「遊行」を考えてみますと、次のようになります。まず雨期ですが、この期間に集中的に雨が降ります。1961年から1990年までの30年間の統計ですが、例えばカルカッタでは6月に291.7ミリの雨が降ります。7月が374.9ミリ、8月が345.7ミリ、9月が295.9ミリで、10月は133.4ミリに減ります。

ヒンドゥスターン平原は何しろ巨大な平べったい埋め立て地のようなものですから、このように集中的に雨が降ると、水は川筋をおとなしく海に向かって流れるというより、辺り一面に溢れかえるということになります。何しろ舎衛城のところが水面から約90メートルくらいで、これはガンジス河の河口のカルカッタから約900キロ上流に当たりますから、ガンジス河は100メートル下るのに900キロを要するということになります。1メートル当たり9キロということになります。すなわち坐っている私の頭のところから足先まで水が流れ下るのに、約9キロ、方南町から中野新橋くらいまでかかるということになるのでしょうか。先日中央学術研究所の西さんに計算してもらったのですが、これは斜度で云いますと  $0.00572958^\circ$  となるそうです。おそらく私の家は築25年で、重い本を積み上げていますから、障子など1.5センチくらいすき間が空いてしまっています。これは斜度何度くらいになるのか分かりませんが、おそらく5度くらいは傾いてしまっているのではないのでしょうか。しかしガンジス河の斜度は何と  $0.00572958^\circ$  なのですから、これは水平と言ってよいくらいものです。ですから一度に大量の雨が降ると溢れ返ってしまうのも道理なのです。

ここにブラフマプトラ河の測量数値があります。

#### 資料 11



ブラフマプトラ河はバングラデシュを流れる河で、ヒマラヤ山脈から河口までそれほど距離はありませんから、ガンジス河に比べるとよほど普通の河に近いと思ってよいと思いますが、しかし乾期には深さ3メートルしかない河が、雨期には溢れて毎年大被害を与えます。要するに雨期には15メートルを越えるということを示しています。

私たちはインドの雨期を経験したことがありませんので、各地で今年の雨期には水はどの辺まで来たかを聞いて回りました。

これは舎衛城の給孤独長者＝スダッタ長者の屋敷跡とされている遺跡からラプティ河の

方向を写した写真です。

#### 資料 12



この景色は見覚えのある方も多いのではないかと思えます。遠くの方に水が写っておりませんが、雨期にはこの景色全体が水の下にあったそうです。

またこの写真にも見覚えのある方が多いのではないかと思えます。

#### 資料 13

これはベナレスのラリター・ガートの写真です。このすぐ右が火葬場です。ただ普通の写真とちょっと違うのは、手前に土が写っていることです。要するに中洲に上がって写真を取ったわけで、乾



期には巨大なガンジス河でも、水が流れている部分はごく少ないということを示しています。しかし雨期には水が溢れ返るわけでありまして、ここにシヴァ神の像が描かれてあります。これは坐っておりますが、雨期の前は立っているシヴァ神の像だったそうです。すなわち毎年、雨期が終わると絵が変わるということで、それはなぜかといいますと、雨期には水没してしまって絵が汚れるからです。ここはベナレスのガートでは川下に当たりますが、少し川上にアッシ・ガートというガートがあって、ここは毎年水が堤防を越して、町に水が入るということです。

このように雨期には水が溢れ返るわけですが、乾期にはからからになってガンジス河に

もほとんど水がないという状態になります。皆さんはガンジス河の水深はどのくらいだと思いですか？

これはアッラハバードというところで、ガンジス河とヤムナー河が合流している地点で、サンガムと呼ばれる地点の写真です。

#### 資料 14

実はもう一つ神話上のサラスヴァティーという河も流れていて、この3つの河が合流しているというヒンドゥー教の聖地の一つで、毎年マーグ・メーラーの時には数十万のインド人が集まると云います。私たちは船に乗ってこの合流地点まで行っ



てみました。しかし船はこの合流地点まで入らないで引き返します。なぜかといいますと、この地点の水深は浅く、船の底が地面にひっかかるからです。この辺の水深は5フィートといいますから、私の背丈より浅いということになります。

これはソン河という河の景色です。

#### 資料 15



ソン河もインドの大河の一つでこれは、デカン高原からガンジス河の方に流れて、パトナのところでガンジス河と合流しています。この写真は橋の上から撮ったものですが、地図ではこの橋は「インドでもっとも長い橋」と書いてあります。実は今ではパトナにかかっているガンジス河の橋がもっとも長く、こ

れは7キロあるということです。

余談ですがこの橋の上は大渋滞でありまして、橋の手前数キロのところから大型トラックがびっしり詰って、車はまったく動きません。これは橋を渡るだけでまる1日かかるのではないかと覚悟しましたが、インド人はのんびりしたもので、車の陰で昼寝をしている

人もあれば、渋滞目当ての屋台で食事をしている人もいます。何しろこの渋滞は3日も続いている、といって平気なものです。ガイドの Tiwari に、これはインドの大 Problem だといいましたら、Tiwari はこれも「No Problem」だといってました。わたしにはなぜこれが「No Problem」なのかわかりませんので、ずいぶん長い間議論しましたが、結局分りあえませんでした。また、町中にお巡りさんがたくさんいるのに、どうしてここにいらないだと言いましたら、「こういう場所にお巡りさんがいると却って混乱するんだ」という答えでした。お巡りさんは職権を利用して、金を払うものを先に通そうとするから、却って混乱するということでした。

お巡りさんがいなかったお陰か、それでも車は徐々に動き始めました。中島君に距離と時間を詳しく記録してもらっていたのですが、橋に乗ったのが7時5分で、4キロほどの橋を渡り終えたのが、10時35分でした。実に3時間半もかかったわけです。なるほど「インドでもっとも長い橋」というのは、こういう意味だったんだと納得したわけでございます。

それはともかく、写真をごらん下さい。これが「インドで一番長い橋」から見たソン河の流れでありまして、船の底がつかえるので人々が押している光景です。水は人の膝くらいまでしかありません。この写真では見えませんが白鷺の足が立つような深さなのです。ですから河のもっとも深いところもおそらく1メートルはないと思います。

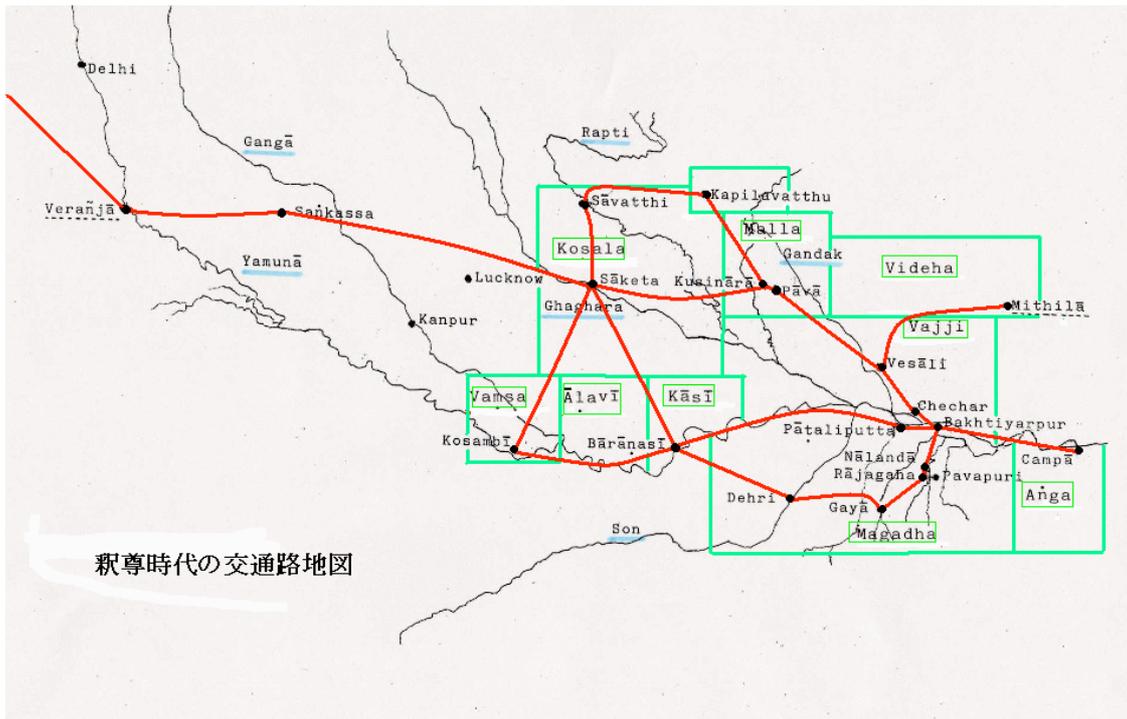
こういう具合ですから、乾期には河を渡るという障害もほとんどなかったのではないかと思います。確かに歩いて渡れないところもあったでしょうが、小さな船とか筏で十分に用を足しただろうと思います。牛の背中につかまって渡るといようなこともあったようです。

また険しい山や谷もなく、一面が野っ原なんですから、したがって極端に言えば、ヒンドゥスターン平原はすべてが道であったということもできます。そう言えば私も以前、ブッダガヤーから尼連禪河を徒歩で渡りまして、前正覚山まで道のない畑をずっと歩いていった覚えがあります。

とはいいいながら、常識的に考えれば、遊行には宿泊場所も必要ですし、水も食事も必要です。4月5月の酷暑期には、陰に入って憩うことのできる街路樹も必要です。それに盗賊や猛獣などの危険を避けるということも必要です。そこでやっぱり交通路というものは形成されていたであろうと思います。

原始聖典などに記されている遊行ルートを考え合わせてみたのが、次の釈尊時代の主要交通路地図です。

資料 16 ;



これは陸上の交通路ですが、水路もあったであろうと思います。インドの河はそれこそ流れているかいないか分からない程度にゆったりと流れています。ガンジス河やヤムナー河、ガンダック、ガーグラ、ソン河など水の流れる速さをゴミなどを目安にして目測で測ってみました。平均すると時速2キロから2.5キロというところではないかと思います。岸边はそれこそ時速数百メートルしかありません。したがって交通機関としては不適切ですが、大量物資輸送機関として船や筏が使われたのではないかと思います。ゆったり流れているから、川上に上るということも比較的容易です。したがってこの以外にも水上交通路があったとお考え下さい。

このような自然条件の元に遊行はなされたわけですが、少し休憩をいただいて、その後で遊行の実際と、それを適用して釈尊最後の遊行を描いた「涅槃経」を解釈して、われわれが作ろうとしている「釈尊年表」とはこのようなものだということをお話させていただこうと思います。

## 【5】遊行の実際

今まで外堀を埋めるような形で、「遊行」を考えてきましたので、これから釈尊時代に具体的に「遊行」がどのように行われていたのかを考えてみたいと思います。

まず「遊行の季節」ですが、これは雨期ではなく乾期であるということを申し上げました。しかしそれでは雨期を避けた他の月すべてに遊行が行われたかというところではありません。

釈尊教団にも宗教法人の「寄付行為」に当たるような規定集がありまして、それを「律蔵」と言いますが、この規定としては4月16日から7月15日までの3ヶ月間が雨安居

でありまして、この最後の7月15日が自恣という催し物のある日です。日本のお盆はこれに由来しています。しかし場所によっては雨期が違いますし、都合によって4月16日から入れないという場合もありますから、5月16日から8月15日と場合もありました。これを後安居といいます。できるだけ後安居も過ごすようにと勧められていましたし、実際には8月中旬まで雨期は続きますから、お釈迦様初め仏弟子たちの多くは普通は前後の安居を併せて過ごしたのではないかと思います。迦絺那衣

そして規定ではこの後に遊行に備えて衣を調える、「迦絺那衣」の期間が定められています。迦絺那衣というのは古い着たきり雀の衣を新しい衣に替えるときには、一時的に規定に定められた3種類の衣、すなわち3衣以外に衣を持たなければなりませんから、この規定以外の衣をいいます。その期間が最大4ヶ月認められておりました。いわば新しい年を迎える準備で、これはお坊さんにとっては重要な期間です。しかし4ヶ月というのは最大延長してということで、本来は短ければ短いほうがよいわけです。ですから平均的には1ヶ月くらい見込んでおけばよいのではないかと思います。

比丘たちはそれから遊行に出るのですが、その目的の一つは雨安居中離れて暮していたお釈迦様に会って説法を聞くためです。このように雨安居を終えてお釈迦様に会うために集まることを「夏の大会」といっています。したがって雨安居を終え、迦絺那衣の期間を過ごした比丘たちは、一斉に遊行に出たわけです。古代の中国の暦でいえば大体9月の中旬ころからであったと考えられます。

しかしせっかく比丘たちが待ちかねていたように、雨安居を終えてお釈迦様に会いに出かけてきたのに、お釈迦様が遊行に出られた後であったということでは、遠い道のりをせっかく遊行してきたのに、目的を達することができないということになってしまいます。そうならないためにはお釈迦様は雨安居を終え、迦絺那衣を終わった後でも、しばらくは雨安居した地点に留まっていなければならないということになります。比丘たちは広いインドの全国各地からやって来るわけですから、それが1週間、2週間というのでは不足です。おそらく断続的に約2ヶ月くらいの間は、お釈迦様はそうして比丘たちに会われたのではないかと思います。お釈迦様はその後に遊行に出られるわけです。

このように考えてみますと、4月16日から8月15日までは雨安居、それから9月15日ころまでは迦絺那衣の期間、そして11月15日ころまでは夏の大会ということになり、お釈迦様はその後に遊行に出られたものと考えて差し支えないのではないかと思います。

「涅槃経」ではお釈迦さまは最後の雨安居を竹林村で過ごされ、そのあとヴェーサーリーにその近郊に住していた比丘たちを召集されて、説法され、そのとき3ヶ月後に入滅すると宣言されたと書かれていますが、それはこの「夏の大会」の最後の時期であり、それからすぐに遊行に出発されたのではないかと思います。それが11月15日ころであったとすると、3ヶ月後というと2月15日ころになりますから、入滅の日にちとピタリと一致します。

「夏の大会」ということを申し上げましたが、大会は雨安居に入る前にも設けられています。これを「春の大会」と言います。これは雨安居の期間中積尊と別れて過ごさなければならないので、その前にお釈迦様のご法話を聞くために設けられたものです。これは4月16日の前2ヶ月間、すなわち2月16日から4月15日ころまでと考えてよいのではないかと思います。この期間はインドでは40度を越す酷暑期に当たりますが、暑いのもものともせずにお釈迦様たちはお釈迦様の元にはせ参じたのではないかと思います。比丘たちはお釈迦様と一緒に雨安居過ごしたかったでしょうが、人数にも限りがあつてそうもいきませんから、比丘たちはお釈迦様に会った後は、それぞれ自分たちが雨安居を過ごす土地に帰って行ったわけです。

実は現在のジャイナ教でも遊行は行われておりまして、インド暦のŚrāvaṇa月からĀśvina月までは遊行しません。これは古代の中国暦の4月16日から7月15日までに相当しますから、仏教の前安居の期間とまったく同じです。そしてサドゥーたちがもっとも盛んに遊行を行うのは太陽暦の3・4・5月というこの「春の大会」に相当する季節ということでした。

したがってこの期間はお釈迦様は次の雨安居地に到着していなければなりません。お釈迦様が動き回られていたら、仏弟子たちがお釈迦様を捕まえることができないからです。そうするとお釈迦様が遊行できる期間は11月16日ころから2月15日ころまでの3ヶ月間だけということになります。

この期間は短いような気もしますが、しかし普通の比丘たちの遊行は大体2ヶ月間であったようです。それが「2月遊行」という言葉で表されております。「3月遊行」という言葉はありませんし、「1月遊行」は病気などの特殊な場合であったようです。したがって一般の比丘はこの2ヶ月の間にお釈迦様に会いに行つて、また戻ってくるか、新しいところに移るということをしていたのではないかと思います。もちろん春の時期と、夏と2回行うということもあつたと思います。しかし大体1回の遊行期間は2ヶ月であつたということです。

これに比べてお釈迦様の遊行期間は3ヶ月のみに限定されていますから、その分遊行に出られれば長かつたのではないかと思います。それにやはり全国各地からぜひ来てほしいという要請が多かつたからではないかと思います。そこでお釈迦様は動ける期間はこまめに動かされたのではないかと思います。しかしお釈迦様の遊行は単なる「旅」ではなく、布教の旅なのですから、行く先々ではしばらく逗留されて、その近在の仏教徒に教えを説かれたのではないかと思います。

またお釈迦様の交通手段ですが、「律蔵」の規定では、比丘は雌牛の引く車、比丘尼は雄牛の引く車に乗ってはならないという規定があるだけで、その他の禁止規定はありません。なぜ男は雌牛の引く車、女は雄牛の引く車に乗ってはいけないのか、それは目の前をちらちらされたら、つい淫らな気持ちを起すからではないかと思います。それはともかく、船にも馬車にも人力車にも乗つてよいわけで、船の中で雨安居を過ごすことさえ許されて

おりますが、あまり乗りものに乗ることは奨励されておりませんし、遊行は大体どこからどこへ行くということ自体が目的ではありませんので、原則としては歩きであったのではないかと思います。

それではその歩きぶりはどうであったかということですが、尻っばしよりしたり、大手を振り、身体を揺すって、大股に歩くということはマナーに反するとされています。伏し目がちに静々と歩くのがマナーです。それに大きな托鉢用の鉢を持っています。したがって歩く速度は、せいぜい時速4キロくらいであったろうと思います。

またお釈迦様は大体昼前に食事にお呼ばれして、食事後説法をされてから、その後に出発されるというのが普通の日程でしたから、出発は早くて午後1時ころではなかったかと思えます。そして夕方日が沈む前に目的地に到着され、訪問客を受けて、夜は比丘たちに説法されました。

したがって1日に進まれる距離は、時速4キロ×3時間くらいで、約11、2キロくらいではなかったかと思えます。仏典ではお釈迦様の1日の行程は1由旬と伝えられています。実はそもそも1由旬という距離の単位がどれくらいかが問題なのですが、北伝では唐時代の里などに当て嵌めて計算してみますと、大体7キロになります。南伝では、例えば「王舎城を出発して日々1由旬を進み、王舎城からカピラヴァストゥまで60由旬あるから、2ヶ月で着こうと出発された」（南伝28 p.186）などと記されています。私の計算では、KapilavatthuとRājagahaの間は約500キロですからこれを60で割ると、8.3キロになります。あるいは舎衛城とサーケータの間の距離は6由旬とされています。この間は大体100キロくらいですから、これによりますと約16キロになります。このように区々さまざまではっきりした長さがわかりませんが、なさまざまな記述を総合的に判断すると、南伝では11キロくらいが妥当ではないかと思えます。

これについてはいずれ論文を発表させていただきたいと思っておりますが、もしお釈迦様の1日の行程が私の推理した通りであれば大体11キロということになり、これは1由旬の距離11キロと合致することになります。

ちなみにジャイナ教のサドゥーは電車にも自動車にも乗らないで、1日に平均8マイルから10マイル歩くということでした。1マイルは約1.6キロですから、8マイルは13キロほどになります。10マイルは16キロです。そうするとお釈迦様よりも少し長い距離ということになりますが、現在のサドゥーはジャイナ教の聖地参拝のために遊行するわけですから、いわば目的のある旅行であって、意味が少し異なるからかもしれません。

なお経典によりますと、お釈迦様はいつも1250人や500人の比丘と一緒に、遊行もまたその通りであったように書かれています。それはいうまでもなくオーバーな記述であろうと思えます。お説法にはそれくらいの人数が集まったかもしれませんが、遊行にこれほどの大人数を引き連れていたなどとはとても考えられません。小さな村などでは、こんなにたくさんのお坊さんが一度にやって来たら、たちまちパンクしてしまいます。宿泊場所は木の下でよいとしても、食事が大変です。逆にお釈迦様の最後の遊行は阿難と2

人きりであったようにも見えますが、これも実際ではないと思います。涅槃経にも阿難のほかにウパヴァーナ (Upavāṇa) という侍者が出てきますから、おそらく5人から10人くらいのお供はいつもついていたのではないのでしょうか。

以上のように考えてみますと、お釈迦様の遊行は非常にゆったりしたものであったということになります。そもそも遊行はどこからどこへ行くということが目的ではなく、お釈迦様にとっては布教活動であったわけですから、あまり世俗的な「旅行」という概念で考えないほうがよいと思います。

#### **【6】涅槃経＝最後の遊行を読む**

以上のような遊行に関する知識をもって「涅槃経」を読みたいと思います。なお、「涅槃経」に書かれている釈尊の年表記入に役立ちそうな記述はそう多くはありませんで、次の通りです。

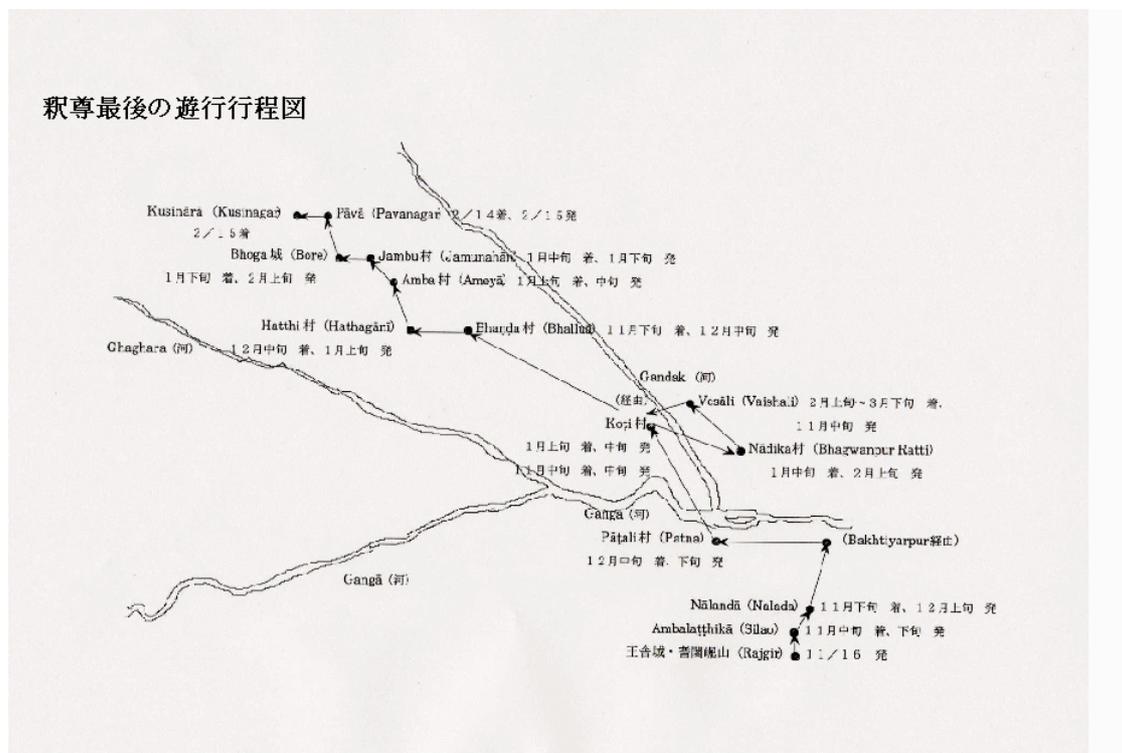
## “Mahāparinibbāna-suttanta” の釈尊年表記事

- 〈王舎城・靈鷲山を出発される〉 …… ?
- 〈Vesāli の郊外・竹林村にて最後の雨安居に入られる〉 …… (4/16)
- 〈80歳となり衰えたことを慨嘆される〉 …… 雨安居中  
 Pāli ; 「アーナンダよ。わたしはもう古い朽ち、齢をかさね老衰し、人生の旅路を通り過ぎ、老齢に達した。わが齢は80となった。譬えば古ぼけた車が革紐の助けによってやっと動いて行くように、恐らくわたしの身体も革紐の助けによってもっているのだ。」 (DN.vol. II p.100)
- 遊行経 ; 「我今疾生舉身痛甚。… (略) …吾已老矣年粗八十。譬如故車方便修治得有所至。吾身亦然。」 (大正 01 p.14a-b)
- 白法祖 ; 「今我身皆痛。… (略) …今佛年已尊。且八十。如故車無堅強。我身體如此無堅強。」 (大 01 p.164c)
- 失訳 ; 「舉軀痛甚。… (略) …我亦已老。年且八十。形如故車。無牢無強。」 (大正 01 p.180a)
- Skt. ; 「アーナンダよ。人格完成者は、もう古い朽ち、齢を重ねて八十歳となった。譬えば、古ぼけた車が2つの車輪にたよってやっと動いて行くように、人格完成者は古い朽ち、齢を重ねて80歳となり、2つの車輪によってやっと動いているのだ。」 (p.192)
- 〈悪魔に3ヶ月後に入滅すると約束される〉
- 〈 (Vesāli の近郊に住する比丘たちを集めて) 3ヶ月後に入滅することを宣言される〉 …… (11/15)
- Pāli ; 「もろもろの事象は過ぎ去るものである。怠けることなく修行を完成なさい。久しからずして修行完成者は亡くなるだろう。これから3カ月過ぎたのちに、修行完成者は亡くなるだろう。」 (DN.vol. II p.120)
- 遊行経 ; 「汝等當善受持稱量分別。隨事修行。所以者何。如來不久。是後三月當般泥洹。」 (大正 01 p.16c)
- 白法祖 ; 「莫怪却後三月當般泥洹。佛去亦當持經戒。」 (大正 01 p.165b)
- 失訳 ; 「佛後三月。當般泥洹。勿怪勿憂。且夫一切去來現佛。皆從法得。經法且存。但當自勉勤學力行。」 (大正 01 p.181a)
- 法題 ; 「汝等當知。如來不久。却後三月。當般涅槃。」 (大正 01 p.193a)
- 〈入滅〉 …… (2/15)

すなわちヴェーサーリーで雨安居に入られたということと、このときに「80歳の老人になった」と嘆かれるところと、雨安居を開けた後に3ヶ月後に入滅すると宣言される所です。雨安居に入るのは4月16日、もし入滅が2月15日であるとする、入滅の宣言は11月15日ころということになります。またこのときお釈迦様は80歳であったということです。

これに遊行に関する基礎知識を導入して深読みしてみますと、次のようになります。

### 資料 18



なお、お配りしました「年表」はこの図の元になりました基礎資料で、現在のところまだ「試作」段階でございます。釈尊の晩年のことを伝える経典はまだ別でございますから、それも書き込まなければなりませんし、もう少し厳密に検討しなければならない事柄も残されています。

例えば、この地図には詳しく仏典に現れる地名と現在の地名が書き込んであります。しかしこんな詳しい地図をご覧になるのは、よほどの専門家でも初めてのことではないかと思えます。ナーランダーとパータリ村はすでによく知られており、皆さんの中にもおいでになった方が多いと思えますが、その他の地名は中村元先生の釈尊伝の研究でも不明となっています。

それなのにここでは非常に詳しく書き込んであるのですが、実はこれは Dr. Jagdishwar Pandey という方の 1996 年に出版された “On the Footprints of the Buddha--Identification of Controversial and Unknown Places” という研究書によったものです。この方はパトナにある K.P. Jayaswal Reseach Institute の Assistant Director という方だそうで、私は面識がありませんが考古学がご専門のようです。したがってこの書物は考古学的な成果によって書かれている学問的にある程度信頼してよいものだと思いますが、この書物も先程ご紹介したパトナ博物館のパンデイ博士からいただいたものです。

実はこの書物を読んだのは、うかつなことに帰国してからのことで、ここに紹介されて

いる記事を現地では確認しておりません。しかし出国前にわれわれが想定していたお釈迦様のルートとピタリと一致しておりますので、私は感情的にはまったくこの通りに違いないと思っております。ルートというのは、ヴェーサーリーからクシナーラーに行かれるのに、しばらくガンダック河の東を北上されて、そこでガンダックを渡られたのか、先にガンダックを渡られてから、ガンダック河の西をクシナーラーに向かわれたのかということです。そして私たちは西ルートではないかと想定していたということです。しかしこの書物に書かれているところまではとても比定できていませんでしたから、近々これを実際に確認しに、またインドに行きたいものと思っております。

ところで「涅槃経」の記述は王舎城から始まりますが、王舎城をいつころ出発されたか分かりません。しかし先程の遊行に関する知識を生かして考えますと、この年の雨安居は王舎城で過ごされて、11月中旬に出発されたのではないかと思います。とすると、お釈迦様は満79歳の誕生日を王舎城で迎えられたということになります。

実はかなり時代が下ってからの資料ですが、お釈迦様成道以降の45年間の雨安居を過ごされた所を記したものがいくつかあります。それによりますと、79歳の雨安居は舎衛城で過ごされたことになっています。しかしこれらは成道20年目から44年目まではすべて舎衛城としています。実はこうなるにはこうなる背景があるのですが、それはともかくとしてよく分らなかったから仕方なく舎衛城としたまでのことで、まったく真実性はありません。

しかし先ほど申し上げました遊行についての基本知識を生かして考えますと、絶対に王舎城で79歳の雨安居を過ごされたに違いないと確信を持つことができます。

ちなみに王舎城で雨安居を迎えられる前に満79歳の誕生日を迎えられたというのは、これはお母さんのお腹に入られたときから数えての「満年齢」ということです。お釈迦様は4月15日に入胎されて、ちょうど10ヶ月間マハー・マーヤーのお腹の中におられて、2月15日に出生されたわけですから、お誕生日は4月16日の雨安居に入る前の日ということになります。お釈迦様の年齢がこのように入胎からの満年齢で数えられているということは、「中央学術研究所紀要・モノグラフシリーズ」の第1号でご報告させていただいた通りです。

そしてこの年齢の数え方にしがいますと、お釈迦様が最後の雨安居をヴェーサーリ郊外の竹林村で過ごされたときに、阿難に「私も80歳になって、老いさらばえた」と慨嘆された状況とピタリと合致します。

お釈迦様はこのように79歳になられた直後の雨安居を王舎城で過ごされ、その後1ヶ月を迦絺那衣の期間として過ごされ、その後2ヶ月を各地からお釈迦様に会いにやって来た弟子たちにお会いになって、出発前に王舎城近辺に住む弟子たちを召集されて、お別れの説法をされた後に遊行に出られました。

さてこの地図ではパータリ村に行くまでにちょっと回り道をしております。実はこれが古代の王舎城とヴェーサーリを結ぶ幹線道路でありまして、これは王舎城からナーランダ

一を経過して、現在の Bhakutiyapur に至り、ここでガンジス河を渡ります。この辺は実はガンジス河でもっとも川幅の広いところでありまして、ガンジス河の中には大きな中洲があり、ここには現在 Fatehpur, Rampur, Medampur, Kacchi, Dergah といった村があります。これら村々を経由して、再びガンジス河を渡ったところが先ほど紹介しました Chechar という村で、ここには大規模なパーラ王朝時代の遺跡があるというところでございます。

ですから普通はこの道を通ってヴェーサーリーに行かれるところですが、このときはわざわざ遠回りして、パータリ村に立ち寄られたということになります。それはなぜかと申しますと、その時マガダの王様である阿闍世王が対岸のヴァッジ国からの侵攻を防ごうとしてここに城を築いていたからです。そもそもこの「涅槃経」は霊鷲山で阿闍世王がヴァッジ国を攻めようと思うが成功するであろうかと、お釈迦様に尋ねるシーンから始まっています。お釈迦様は遠回しにそれがよくないことを説かれた後に王舎城を出発されたわけで、したがってこの経典の背後にはマガダとヴァッジのまさに戦争に至ろうという不穏な空気があったわけです。そこでわざわざ築城中のパータリ村を訪れられたものと考えられます。そのお陰かどうか、幸いにマガダとヴァッジ国の間に戦端が開かれるということはありませんでした。このようにお釈迦様の時代にはパータリ村はまだ寒村で、築城中であったわけですが、先に申し上げましたようにここはガンダック、ガークラ、ソン河がガンジス河に合流する地点で、物資集散のためには格好の場所でありましたから、阿闍世王の息子の Udaya-bhadra (Udāyi-bhadda) のときにここに首都が遷され、後のアショーカ王の首都ともなって、大いに繁栄しました。それが現在のパトナとなっているわけでございます。

お釈迦様はこのパータリ村でも歓待され、そこを立ち去るときに出られた門はゴータマ門、船着き場はゴータマの渡しと名づけられました。ところで現在のパトナにはブッダ・ガートという沐浴場があります。そしてここにつながる道がブッダ・ロードですが、この通りにパトナ博物館があります。博物館ではブッダ・ガートは危険だから行くなと止められましたが、危険をおして敢えて行ってみました。これがブッダ・ガートの写真です。

#### 資料 19

そしてこのボスの Bajrangi Ojha というバラモンにブッダ・ガートの由来を聞いてみ



ましたら、お釈迦様が生まれ故郷からブッダガヤーに行って悟りを開いたときにここを通ったのだという説明でした。その証拠は何かあるのですかと恐る恐る聞いてみましたが、そんなものはない、自分が子供のころからそう聞いているということでした。

実は古代のパータリプトラの遺跡は現在のパトナ市の東側にあり、ここは西側になりますから、ゴータマの渡しとはちょっと違うのではないかと思います、「涅槃経」のことを少しでも知っていたら、ここをゴータマの渡しとして売り出すところではないかと思います。そした



ら仏教の観光客がわっと押し寄せるんじゃないでしょうか。

ちなみにこの近くのガンジス河の流れをご覧に入れます。

#### 資料 20



この写真でははっきり分りませんが、左がソン河で、正面がガンジス河、右上の方にガンダック河が流れ込んでいることとなります。またこのちょっと上流では、舎衛城の近くを流れているガーグラ河がガンジスと合流しています。したがってこれを含めると4本の大河が合流する地点であることとなります。そういうわけでパトナ以降のガンジス河の水深は少し深く、そこでベンガル湾からパトナまでは500トンの船が遡航できるということです。

わたしも30年前に初めてインド旅行したときには、パトナには橋がかかっていませんでしたから、ルンビニーからの帰りに船に乗りましたが、それはかなり大きなフェリーであったという記憶があります。しかし今は陸上のトラック輸送が花盛りですから、ガンジス河に大きな船を見るということはありません。

しかしそれは実は大気汚染という大きな問題を生じておりまして、高村智恵子ではありませんが、インドには空がなくなりました。以前はどこに行っても真っ青な空でしたが、現在ではわたしの住んでいる埼玉県辺りの空の方がよほどキレイです。したがってインドの太陽は昔は地平線から上がり、地平線に沈みましたが、今はスモッグから上がり、スモッグの中に沈みます。

余談になりましたが、こうしてお釈迦様はわざわざ遠回りして、最後の雨安居地のヴェーサーリーに到着されました。ヴェーサーリーは折しも飢饉でありましたから、弟子たちに親戚・知人・友人を頼ってそれぞれバラバラに雨安居を過ごせよと命じられまして、お釈迦様自身は阿難とごく少数の弟子を連れて竹林村というところで雨安居に入られました。4月16日です。そのときに大変重い病気にかかれるのですが、このときはまだ死ぬときではないと寿命を延ばされました。しかし阿難に「自分は80歳になって、車が革ひも

で保護されてかろうじて動いているような状態である」と述懐されました。先ほど申し上げましたように、4月15日が入胎で、それがお誕生日であったわけですから、まさしくこのときに80歳になられたわけです。

こうして雨安居を過ごされ、迦絺那衣の期間を過ごされ、春の大会で各地からやって来た弟子たちにお会いになった後、さあ遊行に出ようという前に、ヴェーサーリの近くに住していた弟子たちを召集されまして、「3ヶ月後に入滅する」と宣言されるわけです。それは11月15日ころで、3ヶ月後は2月15日になりますから、日数としてはピタリと合致することになります。

そしてクシナーラーに向けて出発されまして、その直前のパーヴァーで、鍛冶屋の息子のチュンダの供養を受けて、入滅されるということになります。そのパーヴァーは現在のパーヴァーナガルという村で、アショーカ王のストゥーパがあるということで、畑の中を案内してもらいましたが、それがこれです。

#### 資料 21



しかしこれはどう見てもストゥーパには見えませんでした。ただインドの考古局の遺跡であることを示す看板は立っています。チャンダのマンゴー園も残っているということでしたが、この辺にはマンゴー園はそこかしこにありますから、どれがそれであるということにはできません。また2500年前

のマンゴー園がそのまま残っているなどということも考えられません。

これは余談ですが、実はパーヴァーはジャイナ教の開祖のマハーヴィーラのなくなったところでもあると考えられております。そして実はわたしもそう信じておりました。

現地にもそういう表示がしてございまして、ジャイナ教の寺院も建っております。

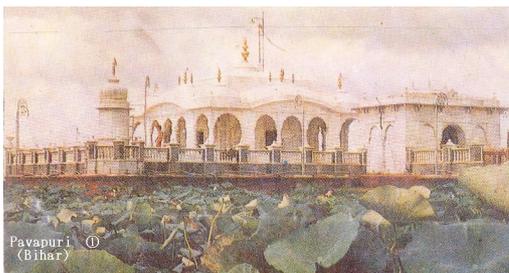


資料 22



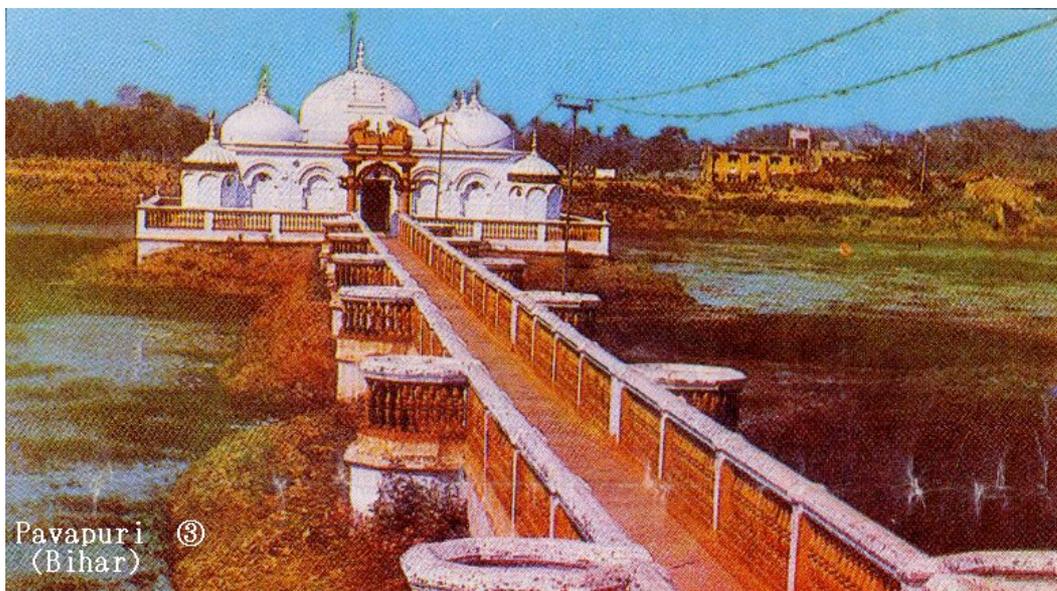
しかし実はマハーヴィーラの亡くなったというパーヴァーはもう一つありまして、それはナーランダのすぐ近くの Pāvāpurī というところ  
です。

資料 23



これがそこに建てられているジャイナ教のお寺です。この建物そのものは65年前に建てられたという新しいものですが、ここのお坊さんは2500年前からあっただと主張しておりました。近くにŚvetāmbara派の寺がありまして、この寺は1956年に建てられたということで

した。



#### 資料 24



ここにはマハーヴィーラの遺骨を納めた2500年前のストゥーパなるものもありましたが、これもとても信じられるような代物ではありませんでした。これは写真撮影禁止ということだったので、残念ながらお見せすることはできません。

ともかくジャイナ教では開祖のなくなった場所で本家争いがあるわけですが、しかしインド人らしく両方とも鷹揚なものでありまして、あまり気にするふうでもありませんでした。

ともかくお釈迦様はこのパーヴァーで再び重い病にかかれまして、途中カクッター河で沐浴されて、これがそのカクッタ

一河に相当します。

#### 資料 25



そして漸くの体でクシナーラーに到着され、そこで入滅されたわけです。

クシナーラーは今でこそ寒村ですが、釈尊当時はそれなりに栄えていたマッラ国の中心都市でありました。わたしはお釈迦様が生まれ故郷のカピラヴァットゥに帰られようとして、志半ばにして不本意にもここで亡くなったとは考えません。

お釈迦様は死に場所としてここを選ばれたのであり、王舎城を出発されたときには、2年後の雨安居はここで過ごそうと考えられていたのではないかと思います。

何度も言うようですが、お釈迦様の遊行は単なる「旅」ではありません。それはあくまでも宗教的な裏打ちのあるものでした。あまり凡俗の人間の考えでお釈迦様の行動を解釈してはならないのではないかと感じています。

## 【7】終わりに

それはわれわれが今進めている「釈尊の生涯」の再構築の基本的姿勢にも関係しています。原始仏教聖典は、宗教家としての釈尊像を、宗教家としての弟子たちが伝えたものでありまして、それが描いている釈尊像は、必ずしもわたしのような凡俗なものを納得させるようなものではないかもしれません。われわれは往々にして、だからそれは真実ではないと考えがちですが、わたしはそうであってはならないと思っています。いわばそれは「下司の勘ぐり」であって、これは大いに自戒しなければならないところだと考えています。

この頃の仏教学研究は「批判的研究」が大はやりです。しかしわれわれは仏教聖典を「丸のみ」にすることから始めなければならないと思っています。いわば「丸のみ研究」です。それが本当の釈尊像を再現できるもっとも近道であると信じています。

そういう意味では、インドや仏跡を体験するということが非常に大切なことではないかと思えます。実感が伴わないとなかなか「丸呑み」はできないもので、つい「下司の勘ぐり」が働いてしまいます。

今回インド調査旅行をさせていただきまして、ただ今は形に現れた成果のごく一部分をご報告させていただきました。しかし実は、現在はまだ形には現れていませんが、これからじわりじわりと現れてくる成果も多かったと思います。

私たちのこの研究に対するご理解とご支援を感謝いたしますとともに、今後も引き続きご支援を戴けますことをお願いいたしまして、報告を終わらせていただきます。有り難うございました。